時空異邦人IKU!!

おおちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時空異邦人ＩＫＵ！！

【Ｎコード】
Ｎ２９３３Ｔ

【作者名】
おおちゃん

【あらすじ】
作者が愛して止まない二大作品、図書館戦争と時空異邦人ＫＹＯＫＯのドッキング作品！！両方知っている方も、知らない方でも楽しめるような作品を心掛けました。ストーリーはＫＹＯＫＯ、キャストは図書戦です☆

過去は一つ、未来はあなたの心の中に（前書き）

初めまして！おおちゃんと申します☆

図書館戦争の二次小説たちにどっぷりハマり、とうとう自らも手掛けてみることにしました！！↑バカ

どうせやるなら、自分の好きな作品と組み合わせちゃおう！と勝手に決めてこういうことに。爆

私の大好きな逆滝（さかたき）君をこれまた私が愛してやまない堂上さんにやって頂こう、ということだけから始まった見切り発車。

どうコケるのか…未だに模索中です（ー＿ー；）

一応連載予定です！

なので、第一話の堂×郁の絡みのなさに嘆かれた方ご安心を！笑

言うなれば今は「戦争」です。

そしてその中でもまだ郁ちゃんがタスクフォースに入る前の回なのです。（それの更に糖度３０％ＯＦＦ的な☆↑ヲイ）

好きな作品×好きな作品というのは、作者側も楽しんで書けるのでとても幸せです。

頑張って書き上げたいと思いますので、どうか最後までお付き合い下さいませｍ（＿＿）ｍ

この作品を読んだ方が、少しでもこの二つの原作に興味を持って頂けたら幸いです。

過去は一つ、未来はあなたの心の中に

国の宝は

たった一人の姫君でした――――…

＊

――４０世紀の未来、星はひとつの国となり「関東国」と呼ばれておりました。

んでもって――…

「姫様っ！！！」

「なんですか、堂上（どうじょう）さん。朝から大きな声をだして」

騒がしい、と小さくぼやきながらも、ここ「関東国」のお姫様である笠原郁（かさはら・いく）はぱくぱくと忙しなく朝のフルコースを口に運ぶ。

「今日こそ日曜に控えた式典でのご挨拶の練習をして頂きますよ！！」

「はいはいわかりましたっ☆」

郁はとびきりの笑顔で即答するが、堂上はこの返事を返して来た後

の郁の行動パターンを既に熟知している。

「“はい”が2回…嘘でしょう！」

「ぶーっ」

「“ぶーっ”じゃないっ！そんなことばかりで今までご挨拶どころか一度も式典にご出席されたことが無いでしょう！？」

堂上の眉間には相変わらずシワが寄っていて、郁はもう少し優しい顔で言ってくれたら考えないでもないかもしれないのになぁ、などとこんな時いつも思う。

もう日常の風景とも言えるこの二人のやり取りに、周りの家政婦たちも堪らずくすくすと吹き出してしまう。

「今度という今度は必ず出席なさって頂きますよ！郁様の誕生式典なのですから！！」

「誕生パーティーなんて折り紙で輪(わ)っか作って鶏のから揚げ食べてりゃ十分です！」

「…一応祝っては欲しいんでしょうが」

不意に出てきた郁の本音に、思わず堂上の言葉攻めの勢いが緩みかけた時――…

「どーうじょーうくーーんっ☆」

「！！？」

いきなり背後から男に抱きしめられ、堂上は色々な意味で一瞬動けなかったが、すぐに体制を立て直してその腕から脱出した。

「…っ、おいっ！離せ兄貴！！」

「またまたぁ、そんなに照れなくてもいいのに」

「誰が照れるか！いい年して弟をいきなり背後から抱きしめたりするな！！」

「やだなぁ、兄弟のささやかなスキンシップだろ」

焦らないの、などとからかいながらも堂上のキレのある右ストレートをいとも容易くいなせてしまうあたり、やはりこの男は侮れない…などと、本人には死んでも言わないであろうことを堂上は内心で一人ごちた。

そんな相変わらずなやりとりを二人が交わしている間に、郁は朝食を残さず綺麗に食べ終えた。

堂上の小言を聞かずに（まぁ、郁が悪いのだが）落ち着いて食べることが出来るように配慮してくれたのだろう、やはり小牧はソツがない。

そんな小牧の優しさに内心感謝しつつ、郁は笑顔で椅子から立ち上がった。

「ごちそうさまでしたっ！小牧さん、行きましょっ」

「ちょ…っ、姫様！挨拶の練習はっ…」

「あたしは式典には出ません！ですから練習も必要ありません！…とゆーワケで行ってきますっ！」逃げるが勝ち、と言わんばかりの駿足で、郁はその場から走り去っていった。

「姫様っ！！！…おい！兄貴も何か言ってやったらどうなんだ！」
「はい、堂上くんの鞄だよ☆早く姫様を追っかけないと王様に死刑にされちゃうよ？」
小牧は堂上の言葉をさらりと聞き流し、飄々とした笑顔で堂上に鞄を渡す。
「僕達は命を懸けて姫をお守りするボディーガードなんだから、さ」
＊
「式典なんて…」
――絶対絶対絶対ぜーーったいにでませんっ！！！
「そんなことしたらそんなことしたら…」
――あたしが姫だってバレちゃうじゃない！！！
郁は授業を受けながら、一人でブツブツと目の前の教科書に向かって呟いていた。
――あたしは家庭教師とか呼んで一人淋しく勉強するなんてまっぴらごめんなの！友達作って遊んだりケンカしたり青春満喫したいのよ！

「…堂上さん達には申し訳ないけど…」

――小学・中学とこれでやって来たんだからせめて高校卒業まで通したい。

郁がこういった態度を取っているので、堂上と小牧はそれぞれ教員免許をとり、（勿論このことは全て学校理事にも秘密で）郁の高校の教師として郁を陰から護衛する形をとっている。

自分の勝手な行動のせいで堂上達にも迷惑をかけてしまっていることには、郁はとても後ろめたく思っている。

――やっぱり、あたしが普通の生活を送りたいとか、ダメなのかな…

＊

「ねぇ笠原ァ、あんた今度の日曜日って行く？」

「え、何？みんなでどこか遊びにでも行くの？」

「やーねぇ、バカ。日曜って言ったらイク姫様の誕生式典でしょうが。いい加減国の一大イベント位覚えときな」

そう言って白くか細い指で郁の額にデコピンをお見舞いした柴崎麻子（しばさき・あさこ）は、どうやら一瞬郁が固まってしまったことに気づいたらしい。

「だーいじょうぶよぉ、そん位のことであんたを死刑にするほどうちの王様は心狭くないわよ。」

そういう意味での固まりではなかったのだが、自分の些細な挙動の

変化にもすぐに気づきフォローを入れてくれる親友の優しさに、郁はただ顔を綻ばせて頷くばかりだった。

「あたし華族（はなぞく）の長だからさぁ、お祝いに舞を踊らなきゃいけないのよね。だから、あんたも見に来ない？いい席とっとくわよ」

「…ごめん、あたし行かない。」

正確には行「け」ないのだが。

「えー、またぁ？…そりゃあ毎年“姫様の誕生式典”って謳ってる割には一度も本人顔出したことないけどさ、さすがに今年は出てくるだろうってみんな言ってんのよ？今年だけでも行ってみたら？」

「ごめん。柴崎の踊りは見たいけど、行かないって決めてるから。」

苦しい言い訳だが、郁が何かをこんなにも頑なに拒むことは滅多に無いことなのは柴崎にも分かっているので、柴崎がもうそれ以上深く突っ込んで来ることはなかった。

「そういえば俺、姫様の噂聞いたぞ」

突然、柴崎の後の席の男子が（恐らく校内一の美少女と噂される柴崎の気を引くためだろう）、クラス中に響く声で話し出した。

反射で郁の肩肘が張る。

「なんかさ、国民の前に出ないのはすっげえブスだからなんだって」

全身の力が抜けた。

――は、…は、

「はぁぁあっ！！？」

「うわっ、急にでかい声出すなよな！…違うって。名前は同じでも郁じゃなくて「イク姫」のこと。まぁ、お前の場合は身長だけが難点だよなぁ」

ごめんごめん、と笑いながら男子は郁に向かって掌をヒラヒラとさせるが、その言葉は郁に対しては全くフォローになっていない。

が、そんなことには露も気づかないクラスメイト達は次々と自分の知っている「姫様伝説」を挙げはじめる。

「城から出ないせいで太っちゃって、階段すら降りられないとか」

「俺は拒食症でやせすぎって聞いたぞ」

「ご病気で休養中とか」

「え？実はもう亡くなられてるんじゃないの？」

「実は最初から存在しないとか」

「サイボーグとか？」

――な、な、な――…

次々と耳に入ってくる内容の度を超えたショックさに、郁はもう口を開けたまま動くことも話すこともできない。

「えーでも、多分それ全部ただの噂よぉ？“姫様はお元気で明るくて可愛らしい方だ”ってお城の家政婦さん達が言ってらしたしぃ」

すかさず柴崎から的確な訂正が入るが、この女は一体いつ城に顔を出しに来ていたのか。本当にこの情報屋は恐ろしくて心臓がいくつあっても足りない。

――ていうか、家政婦さん達はあたしのことそんな風に思っててくれてたんだ…。

完璧お世辞だと思うけど。

分かってるけど。

…やっぱり何だか嬉しいなぁ…。

郁がそんなことを思いつつ頬を俄かに赤く染めると、また別の女子が口を開き始めた。

「でもあの噂は本当らしいよぉ」

――あの噂？…って、どの噂？

「…あっ！知ってる知ってる！“実は姫様のボディーガードは絶滅したはずの竜族（りゅうぞく）の皇子二人で、持って生まれた戦闘センスを日夜磨きながらも、姫様のお側を片時も離れず守りつづけてらっしゃる”…ってヤツよね！」

今度は油断していた小牧に、とんでもない（しかし紛れもなく事実の）情報が降り懸かってきた（ちなみに、堂上は今、郁のクラスの前の廊下の水道の整備中だ）。

思わず小牧の板書を書く手が一瞬止まる。

「素敵ねぇ…」

「私も一度でいいから「姫様」とか呼ばれたーいっ！」

――普通ってそう思うもんなの…？

正直、郁にとって“姫”という呼称はただ周りに壁を張られるだけのものとしか捉えて来なかったので、イマイチ周りの発言に同調することができない。

「でもよぉ、元気ならなんで姿見せて下さらないんだ？」

「写真すら出さないし」

――う。

再び郁の体に力が入る。

「王族は国民の税金で暮らしてるんだろー？だったらちゃんと仕事もこなして欲しいよなーっ」

――ズキン。

正論が今までになく痛い。

――あたしのバカっ！傷つく資格なんてないだろっ！…言われて当然の我が儘通してるんだから…

自然と視界が下に落ちる。

それを見逃す小牧ではない。

「…まぁまぁ、おしゃべりはその位にして。木塚くん次の問題解いてね☆」
「えーーっ！？」
小牧の笑顔に隙は無い。
木塚はこの日から小牧の集中マーク物件リストの新たな一名として名を刻まれた。

＊

「…はぁん、そんなことが噂になってんのか」
愛しのペットである猫型アンドロイドのおりくちの頭を優しく撫でながら、関東国国王である竜介（りゅうすけ）は独り言のように呟いた。
「はい父様。…でも式典にでて私が姫と分かれば普通に学校に通うことは無理でしょうし…辛いところです。」
「それが「辛い」だけじゃあ済まされねぇんだよなぁ」
「え？それってどういう…」
竜介は頭をガシガシと掻きながら、少し言いづらそうに口を開いた。
「「姫が記念すべき１６歳の誕生式典にすら出席しない」っつぅ噂まで広まってな。…今までお前に不平不満を抱いてた輩が各地で反乱じみたことを起こしつつある」
「そんなっ…！」

思わず声が上がる。

――でも、これが現実なんだ。

「…どうだ、郁。」

モゾモゾ。

「…そろそろ「姫」に専念してみたら…」

ぐみーん。

「…っおい、おりくちっ！重要な案件の時はどっか行ってろって言ってんだろうが！」

顔を伸ばすな、顔を！！と、まるでなまはげの様な形相で竜介はおりくちに怒鳴るが、おりくちはどこ吹く風、と言った感じで竜介を丸無視し、竜介の腕から抜け出した。

「郁ちゃん！だったらあたしと遊んでよぉ、たまには可愛い今時の女の子とファッションの話とかしたいのよねぇ」

「え…っと、家政婦さんとかもいる、よ？」

「んなもん却下だ！おいコラ、おりくち！何俺以外の人間に色目つかってやがる！こっちへ来い！」

「嫌よぉ、そっちむさ苦しいんだもの」

相変わらずだなぁ、などと一瞬のほほんとしてしまったが、今の論点はそんな楽しいことではない。

思わずまた顔が俯く。

今度はさっきよりも深く。

「…わかりました。学校は辞めます」

「「……」」

騒がしかった雰囲気も止み、更に郁の顔は上がらない。

堪えられなくなって、その場から去ろうと竜介に背中を向けて歩きだそうとしたのを竜介に止められた。

「…毬江姫を目覚めさせることが出来るんなら、今のままでも良いぞ」

――え…？

「お前の双子の妹で、生まれた時からずっと眠り続けているもう一人の姫、毬江を目覚めさせ、姫の仕事を託すならお前は自由にして良い」

「…ど…うやっ、て…」

「毬江が眠っている寝台の床に有る巨大時計は、その昔、時の神であるサトシによって創り出されたと伝えられていてな。この時計を動かせばサトシの力を借りて毬江姫の失われた１６年を取り戻すことが出来ると思われる」

郁の表示がみるみるうちに晴れてゆく。

「…！！それじゃあっ、」

「ただし」

郁の言葉を遮るように竜介は続けた。

「時計は物理的な力じゃ動かねぇ。世界中に散らばる「神の石」とそれを扱える「能力者」の精神的な力が必要だ」

――それって物理的に一年やそっとじゃ無理なんじゃあ…

でも、ここで断れば即退学だ。

だったら、何もしないよりは絶対にマシだ。

「…何か手がかりは」

「巨大時計の下に神の石ひとつと懐中時計が隠されとった。神の石の名は「時空石」。…他の石のありかも能力者の行方も今はまだ分からん。手がかりはその石のみだ。」

やはり現実は厳しい。

「まずはお前が主人だと石に認めさせるためにその心を示せ。後は石が導くはずだ」

――石に主人だと認めさせる…

「…まぁ、駄目だったら大人しく式典に出席することだな」

「いやっ！！」

珍しい郁の頑なな拒絶の態度に、少しだけからかう程度のつもりで話しかけた竜介は少し驚いて黙ってしまった。

「……あ、えと。…とっ、とにかくやってみます！…から、まだ少し待ってて下さい。」

「…あぁ。ま、せいぜい励めよ。」

「せいぜいって！」

反射でツッコんでしまったおかげで少し空気が和らぎ、お互い思わず軽く吹き出した。

＊

――…とは言ったものの…

「「認めさせる」って…なにを？」

寝るときも護衛のため、堂上と小牧の間に郁は寝転がりながら大きい独り言を言った。

「でもどうして毬江様を目覚めさせる方法が分かっていたのに今まで実行されなかったんでしょうか…」

「なんでも父様が言うには、時計を動かす時に出来る空間の歪(ひず)みに体が小さすぎると耐え切れないらしくって。成長するのを待ってたみたいなんです」

「あぁ、成る程。」

最もらしい解答に、小牧も堂上も納得した表情で頷く。

「でもよかったですね、「姫」からこれで解放されるのでしょう？」

「あー…。それはまだちょっとわかんないんですよね。そもそも毬江が承諾してくれないと成立しない話ですし」

そうなのだ。

この話は、例え毬江を目覚めさせることができたとしても、毬江が首を縦に振らなければ郁の要望は叶わない。

なんとハイリスク・ローリターンな課題か。

――でも、

「でも今はそんなことより早く…、早く、毬江に会いたいんです」

郁は心から願った。

――16年間、ずっと眠り続けているあたしの妹。

会いたくて、話したくて堪らなかった。

どんな夢を見てるの？

…何色の瞳で見てるの？

…あなたの声で聞かせて…

「――よぉっし！！！」

俯せから仰向けに寝返り、郁は自分の頬を両手でぺちぺちと叩いた。

――待っててね、毬江！

お姉ちゃんは頑張りますっ！！

＊

「もう、ダメ…」

いつもの血色の良い太陽の様な表情はどこへやら、郁は青い顔をしながら一人呟く気もなかった言葉を呟いた。

「いやっ、違う！ダメじゃない！！何言ってんのあたし！諦めないって決めたじゃん！！」

昼食時、屋上から一人空に向かってツッコむ。

「兄貴…姫様が壊れてきてるぞ」

「あれが「自分の心と葛藤する」ってことなんだよ堂上くん。見守っていることにしようね☆」

そう言って小牧は天むすを頬張っている堂上にお茶を差し出した。

その時、

「いーくちゃあーんっ☆」

郁の名を呼び、背中の羽を使ってこちらに向かってくる陰には心当たりがある。

「あっ…えっ、おりくち?！珍しいね、学校に来るなんて。どうかした?」

「キングから郁ちゃん宛てに伝言頼まれちゃったのよねぇ」

そう言っておりくちは可愛らしいラブレターの様な封筒を（恐らくただの紙切れをおりくちが自前で包んだのだろう）ぴらりと郁に見せた。

「！！！」

――父様、もしかして石について何かわかったからアドバイスをくれたの！？

「はい、どうぞ」

「あっ、ありがとう！！」

半ば焦るように封筒を開き、郁はあまり封筒には似つかわしくない一枚のコピー用紙を取り出した。

“『式典での挨拶の作法』

一、胸を張る

二、顎を引く（引きすぎて猪木になるなよ！）

三、前を見据えて

四、名前を掲げる

五、ミエを切れ！（アドリブ効かせろよ！）

追伸　上目遣いもまぁ許す！が、あんまり顎を引きすぎるとヤンキーのメンチになっちまうから気をつけろよ！！

――――竜介．”

つまり、あくまでも式典に出ろというメッセージだ。

「…おりくち、父様の弱点ってわかる？」

「知ってるけど…勿体ないから教えられないわ。ごめんね？」

こちらは竜介の腕の一つや二つ折ってやるという意味合いでの「弱点」だったのだが、おりくちは少し違った内容だと受け取ったらしい。

「……。」

見事に当てられてしまい、郁は自分の発言に心底後悔した。

ドドド。

「…ん？」

ドドドドド。

「姫様、何やら下が騒がしく…」
「我々は盗賊一団の『良化隊・検閲組』だ！！！」
堂上の声を遮るかのような怒号が校門の方から聞こえて来た。
「「良化隊・検閲組」…って…。」
「…ダサくないか。」
「ダサいと言われている人達も心外に感じる位にはダサいね」
一瞬相手のあんまりなネーミングセンスによって場が和んだが、今はそれ所ではない。
「首都に盗賊が現れるなんて今まで無かったのに…」
堂上がぼやく。
「…父様が言ってました。あたしに不平不満を持つ輩が反乱じみたことを起こしつつあるって…」
「姫様、ここは危険です。警察に任せて城へ戻りましょう」
小牧が的確な判断を下す。
「でも…あたしのせいかもしれないのに…」
「悔しさを押さえて。責任を感じられるのはとても良いことですが、今は御身の安全を守ることが大切ですよ」
小牧の忠告は正論だ。
「…わかりました。城へ…」

帰ります、と郁が続けようとした時…

「いや！離してよっ！」

――この声って…まさか。

「手塚（てづか）団長ーっ！こいつ髪色がピンクだ！キリト（新種人間）だっ！！」

――柴崎っ！！！

「ピンク…華族か。たしか長は宮廷専属の踊り子だったはずだな。高く売れるはずだ。保護しておけ」

「…ちょっと、そこの朴念仁！何勝手に話進めてんのよ、あたしのこと監禁して何するつもりよこの変態！！」

「なっ…！？誰がお前みたいな饒舌で勝ち気な女相手にするか！」

「さー、どーだか。口では何とでも言えるものね」

「ちょーっとまったぁ！！」

初めて出会ったとは思えない二人の軽快なやり取りを遮る声が屋上から上がったかと思えば、ひゅるるると音をたてながら何かが降ってきた。

ちなみにこの学校は五階建てだ。

どごぉっ！！！

地面がえぐられる音がした。

「…かさは、ら」

「そこのあんた！！あたしの親友に今一体何しようとしたか答えなさい！！」

…いやいや。あんたこそ今一体何した。

校門の辺り一帯にいる全員の眼が腐っていなかったとすれば、今目の前で怒りをあらわにしている少女はたった今屋上から飛び降りて来たのだ。

「…あーぁ。行っちゃった。」

「…あの姫、どうするつもりなんだ」

小牧と堂上はただただ放心中だ。

…な、なんだこの動機は。

手塚は目の前の少女を食い入るように見つめた。

おかしい。

絶対におかしい。

こんな、屋上から飛び降りてきておいてけろりとしていられるような、有り得ないこの女を、

…――可愛い、だなんて。

手塚が黙っているので、代わりに下っ端達が口を挟んだ。

「な…、なんだ、この女。」

「今屋上から落ちて来たよな？フツーに喋ってるぞ？」

「…変な女」

「ちょっ！失礼千万ね！あたしを誰だと思って…！」

「誰だ？」

「だからぁ、この国のひ…」

――あ。

「ひ？」

――い、言えない…

「――兄貴っ、行くぞ！」

「待って堂上くん」

「…は？」

思わず間抜けな声が上がる。

「姫様の「学校内では誰かが私に危害を加えたり無礼を働いても反応しないで」という命令はまだ解けてない。姫様を信じて待つんだ」
「…っ…」
思わず堂上の手すりを握っている手に力が篭り、小牧も苦笑する。
…どうか、ご無事で――
「…笠原？」
柴崎が何かを悟った様に郁を呼ぶ。
郁は、もう後悔しなかった。
後ろを振り返り、全校生徒に笑顔を向ける。
「…みんな、今まで黙っててごめんね」
「「「え…？」」」
――あたしの願い？
望み？
ジレンマ？
…くそくらえっての！

そんなことより、

郁が右手を空に向かって挙げた。

――もっと大切なことがあるでしょ！！

パチンっ

挙げていた手の指を弾いて鳴らした。

これだけで充分堂上達には伝わる。

「うるさい女は引っ込んでな！」

バシュッ！

下っ端の一人が郁に向けて弓を放った。

しかし、郁は避けようともせず、微笑みながらその下っ端を見つめていた。

「笠原っ…！」

当たる、と誰もが思った時、

…空飛ぶ何かが――竜が、郁に放たれた弓を粉々にかみ砕いた。

そして元の姿へと戻る。

「…堂上、先生？」

「――っくそぉ！」

ドォン！

今度はまた別の下っ端が郁目掛けて大砲を撃った。

郁は今度は見向きもしない。

パシリ。

今度はまた別の人間が、その大砲を笑顔で片手でキャッチした。

「――小牧、センセ…」

「え…、えっ…！な、なんで二人が！？」

「瞳が黄金に光ってる…」

急に辺り一帯がパニック状態になる。

「…竜族だ……りゅ、竜族だぁっ！！」

先程まで郁に弓を放っていた下っ端が腰を抜かしながらその名を連呼した。

「手塚団長！竜族です！キリトの竜族です！！うちの一団が全滅されちまう！！」

「竜族…滅びたはずの最強戦士の一族か。生き残りが居たと言うのは本当だったんだな」

手塚の呟きに周りが反応する。

「え？竜族の生き残りの兄弟に守られてるってことは…」

「え？郁って…え？」

「もしかして…」

周りが気づき始める。

そんな中、郁は先程竜介から渡された伝言の内容を思い返していた。

“いいか、郁。王族の挨拶は――…”

――まず、胸を張る。

そして顎を引く。

前を見据えて、

名前を掲げる。

「――私は関東国第一王女・笠原郁」

気高き笑顔で郁は答えた。

「ここは私の国です。乱すことは許しませんよ」

その気高さに誰もが心奪われ、言葉を無くした。

……――その時、

ぱぁぁあっ

「！！？」

制服に入れていた時空石が急に輝き始めた。

「えっ、なっ、な、なに！？」

《郁。お前の「気高さ」確かに感じとった。時を操る杖を授けよう》

声が聞こえたかと思うと、形が変形し、新たな姿へと変化した時空

石、否、杖はまた語り出した。

《名を「タイム・スコーピオン・ケイン」。気高き心持ちて「時」扱わん》

そう言って一度だけシャランと身体を鳴らすと、杖はもう何も語らなかった。

――力が、目覚めた…？

信じ難いが信じるしかない。

――よぉしっ！！

郁は杖を掴み、一か八かで杖に向かって命令を発した。

「“時よ、止まれ”！！」

＊

「――あれ、」

手塚は呟いた。

今まで自分の目の前にいた少女だけがいない。

「…あの子はどこに…」

「ここ、よっ！！！」

ガツンッ！！

「――っっ！！！？」

脳天直撃とは正にこの事か。

知らないうちに自分の背後に回られ、しかも思いっきり杖でぶん殴られたらしい。

――よかったぁ、一応当たってたっぽい！

恥ずかしい結末にならなかったことに内心で郁は一安心する。

「て、手塚団長！」

「騒ぎを起こしたお仕置きです！」

焦る下っ端にぴしゃりと言う。

「この姫様めぇ…！」

「ぶち殺して差し上げましょうかっ」

姫だと知ってしまった以上、何だかんだで一応様呼びと敬語を使うことに決めたらしい。

郁的にはやはり少し複雑だ。

「待て」

誰かと思えば、さっきまで頭を抱えていた手塚が少し顔を赤らめながら郁を見つめていた。

まだ戦う気か、と郁が不安な顔をしながら手塚と目を合わせると、今度は薄く微笑んで来た。

――あ、意外と綺麗な顔してるかも。

ときめきとはまた違うが、なんだかいたたまれなくなって郁は手塚から目を逸らした。

「…その気高さ、心意気…どれを取っても気に入った。」

「は？」

「今日はお前に免じて退散する。が、しかし」

「え、ちょっと」

一体どうしたの、と郁が問い掛けようとした途端、手塚は郁の目の前まで歩み寄ってきて、郁の左手をそっと持ち上げた。

「御身…いつか必ず我が物に。」

そう言って薬指に口づけを落とした。

「…え」

「あ、」

「――なぁっ！！！？」

郁、小牧、堂上の順に思わず声が漏れる。

誰もが固まってしまい、その場から動けない。

それを良いことに、手塚は顔を指から離し、まるで婚約者を見るような顔で郁を見つめ直したかと思うと、その場から消えるように引き返して行った。

「させるかーーーっ！！！」

漸く立ち直った堂上の悲痛な叫びが、校舎内に響き渡った。

郁はただただ真っ赤な顔のまま固まり、堂上の真っ白なシルクのハンカチで左手全体を綺麗に拭かれるがままだ。

――な、なな、何なの、あの人っ！！

…なんて、少しずつ頭が冷えてくると、笑えるような時間はここまでだったことに気づく。

「…あ、」

郁が振り向けば、誰もが再び自然と硬直する。
その沈黙を破るように、堂上は重い口をゆっくりと開き始めた。

「…皆、落ち着いて聞いてほしい。姫様は、」

「いいんです、堂上さん。もう帰りましょう」
「しかし…っ！」

「…堂上、行きますよ」

プライベートも含め、初めて堂上から「さん」を外した。
それは、郁が今まで一番嫌がってきた、自分の立場を周りにしらしめる行為を意味する。
それに気づいた堂上ははっとして、郁の方を振り返った。

…――郁自身が一番、傷ついているような顔をしていた。

そんな顔をさせない為に、笑顔で居続けてもらう為に、傍にいて守り続けてきたつもりだったのに。

…――自分は結局、一番郁が傷つくことを郁から言わせてしまった

のだ。

「――失言でした。帰りましょう。」

ここでこれ以上畏まれば、より郁を傷つける。

そう察した堂上は、敢えて郁に謝罪をせず、生徒に背を向けた。

「じゃあ、行こうか。」

そう言って小牧は郁の背中と膝裏を抱え、まさしく「お姫様抱っこ」をしながら空を飛んだ。

郁はただただ泣かないように口を固く結んで下を向いていた。

堂上も校舎全体に一礼して、その後を追う。

その時、後ろから「あっ…」と言う小さな声が聞こえた気がしたが、堂上は敢えて聞こえないフリをした。

＊

“本日６月１０日、郁姫様並びに毬江姫様第十六回誕生式典を開催いたします”

城内アナウンスが入る。

何千種類もの色とりどりの風船や紙吹雪達が空を舞い、華やかに式

を彩る。

“郁様のご入場です”

全国民が拍手で迎える。

郁は校門で名を名乗ったときと変わらぬ表情で前を見据えながら入場する。

その郁の美しく気高き様に、国中の誰もが感嘆の声を漏らす。

まるで、今までの噂など忘れてしまったかのように。

関東国一の実力をもつオーケストラやシェフたちも城中を盛り上げる。

そんな中、

――あ、柴崎…！

言っていた通り、柴崎は華族の長として郁から少し離れたステージで美しく華やかに舞う。

その絶対的な美しさに、国中の男衆は骨抜きだ。

――うわぁ、やっぱり綺麗だなぁ。

郁も心の底から柴崎に見惚れる。

それと同時に、あの日の出来事がまた、郁の頭を掠めた。

――みんな、あれからどうしたのかな。

…柴崎…、怒ってるかな。

いや、呆られちゃったよね、きっと。

ひょいっ。

一人でぼうっと考えていると、何やら急に視界が高くなった。

「――え？」

足元を見れば――人だ。

しかも三人がかりで動けない。

「え？ちょっ…」

「危ないですからしっかりお掴まり下さいね☆」

「え？…つ、掴まる！？」

言うが早いか、三人の女官達は郁の質問には答えず猛スピードで郁を客席へと運んでいった。

「えっ、えっ、なになにっ！？キャーーーーーっ！！？」

「喋ると舌噛みますよー♪」

こんな大観衆の中、舌を噛んで喋れない姿なんて、そんな失態だけは晒したくなかった郁はそれを聞いて慌てて無理矢理口を手で塞ぐ。

これは何の拷問か！？と、郁はこんがらがる頭の中で必死に訴えた。

「――おっ、おい、堂上に小牧！くせ者が…っ」

「大臣様ご安心を」

「姫様へのプレゼントですから」

二人は微笑ましく郁を見遣った。

＊

「とっ、止めて止めて！一体どこまで行く気っ…」

女官たちの走る勢いが落ち着いてきて、ようやっと郁が口を開けるようになった時、

「「「郁っ！！」」」

――え。

空耳が聞こえたような気がした。

――いやいや、おかしいよ。だって…

「…みんなが居るはずなんて…」

誰にも聞こえない声で郁は呟き、客席を振り返った。

――本物だ。

「…み、みんな…」

「「「……」」」

「き…来てくれたんだ」

「「「……」」」

誰も答えない。

そのくせ、目も逸らしてくれない。
そのことが逆に郁の不安を煽る。

「あの…さ、」

それでも、ごめんねだけは伝えておきたいと思い、口を開いた郁に、

「「「ごめんっ！！！」」」

「――――え？」

「俺達…いくら郁の正体知らなかったとは言え、姫様の噂いっぱいして…」

「それに学校を守ってくれたのに…あたし、まだお礼も言わないまま…」

「俺も…」
「私たちも…」

「……。」

今度は郁が黙る番だった。
ただし、郁の場合は涙を堪える為に、だが。
「ありがとう、郁。正体を明かしてまで、俺達を助けてくれて…」
――もう、無理。限界。
郁の涙腺は決壊した。
「――うわっ！どうした郁！？」
「木塚っ！あんたまた変なこと言ったんでしょう！？」
「えっ、俺！？」
「やーんっ！郁泣かないでっ」
「郁っ！」
――あぁもう、余計に泣かせないでよぉ！
郁は掠れる声を必死に搾りだす。
「いっ…「郁」って呼んでくれるの？…あたしと…まだ友達でいてくれるの？」

クラスメイトは一斉に目を丸くして、なぁんだ、そんなこと。と、一様に笑った。

「当たり前だろ！俺達、「郁」も「姫様」も大好きなんだからなっ！！」

みんなの嘘のない言葉に、郁もまた、今日一番の笑顔になった。

「…ありがとう。あたしも大好きっ」

えへへ、と郁が照れ隠しに頭をかく仕草をしていると、

「それに今までずーっとバレないくらい庶民じみてるしなーっ」

「…ん？何それ、褒めてんの？」

「日直の日もよく忘れるし」

「うっ…うるさいうるさーいっ！！」

「うるさいのは郁だろー？」

「それは確かに」

「えー、ひどい！真理子まで木塚の味方ーっ！？」

＊

「…ククッ」

「――どうかなさいましたか、国王」

「いや、立派な娘になったもんだと思ってな」

「…そうですか？我々はいつも振り回されっぱなしですが…」

全く、あのお転婆は目に余るものがあります。などと国王の前でぼやいてしまう程度には、堂上の気苦労は絶えないらしい。

「それはそれはご苦労さん。…でもそれも悪くねぇなと思ってんだろ？」

まさしくニヤニヤと言う擬音語が似合いそうな表情で見つめられ、堂上は苦虫を噛み潰したような表情をして竜介から視線を逸らした。

「…まぁ、でも」

一つ咳ばらいをしてごまかすような態度を取ってから、堂上は呟いた。

「郁姫様らしいですね」

堂上たちの目の前では、とても楽しそうに笑い合う郁達が見える。

郁にとって、一生忘れることのない誕生日となった。

＊

――時計のネジはこの手で巻きだした。

石と能力者を見つけて必ずあたしがこの手で針を動かしてみせる！

郁は自分が可愛い妹と楽しく話している近い未来を想像して微笑んだ。

――だから、

待っててね、毬江。

いつか二人が逢える未来を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2933t/

時空異邦人IKU!!

2011年10月9日01時36分発行